宮澤章二没後二〇年展示

宮澤章二の埼玉風物詩

さいたまを歩く、さいたまを巡る

写真「37歳頃の宮澤章二」
宮澤新樹氏提供

さいたま市立大宮図書館

［文学資料コーナー］ 2025年7月3日（木）～8月31日（日）

展示資料目録 No.33

開催にあたって

二〇二五年の今年、大宮ゆかりの詩人・宮澤章二の没後二〇年をむかえます。埼玉県三田ヶ谷村（現・羽生市）に生まれた宮澤章二は、三八歳で大宮市吉野町（現・さいたま市北区吉野町）に移り住み、以降亡くなるまでこの地を拠点として活躍しました。大宮市の教育委員を務めた宮澤は、在職期間最後の二年間には教育委員長に就任しています。また、後年「大宮詩人会」の発足に携わり、初代会長として長年会の運営に尽力するなど、第二のふるさと・大宮に大きな貢献を果たしました。

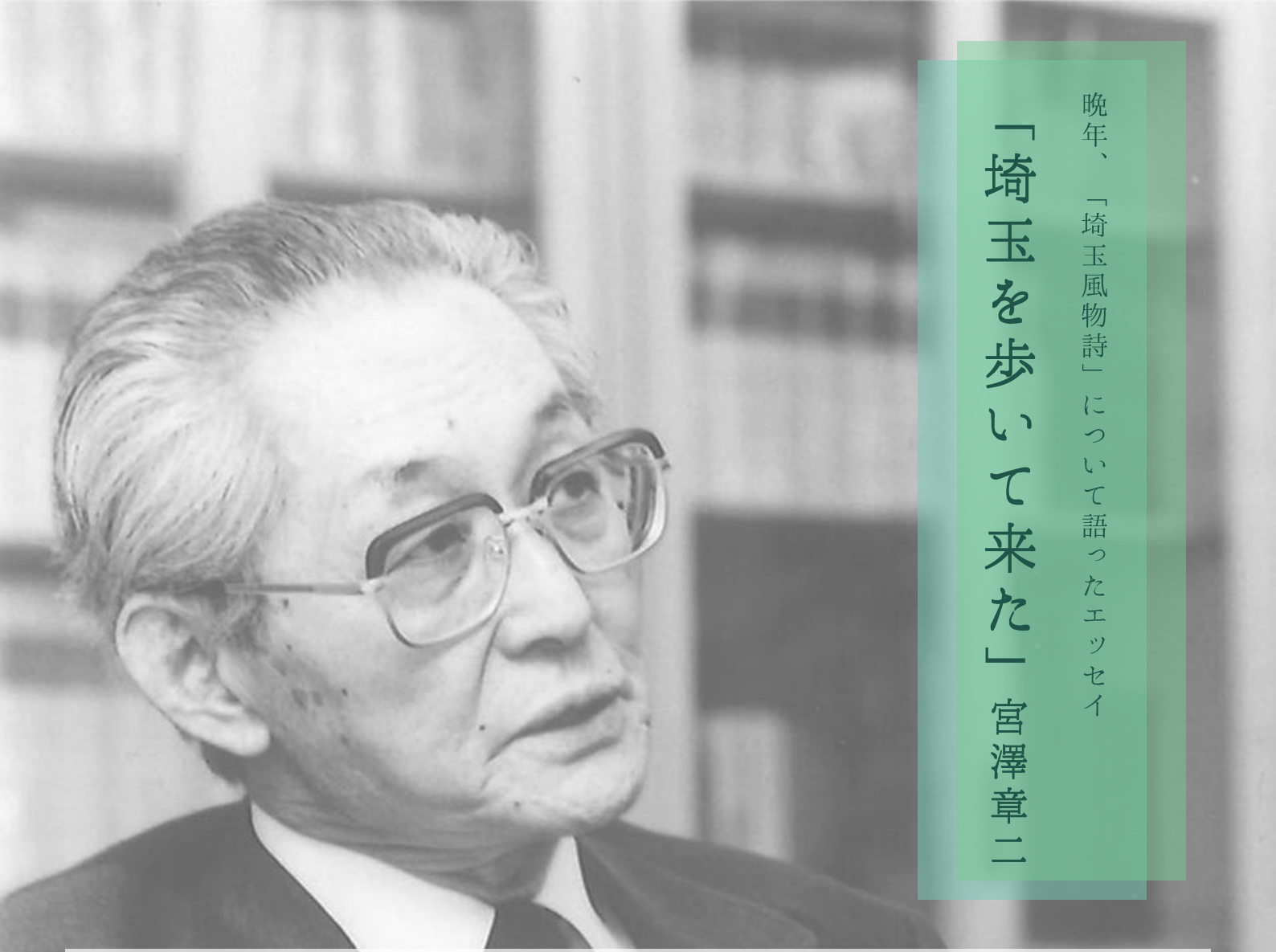
今回は、宮澤が故郷「さいたま」を題材にした作品「埼玉風物詩」を展示いたします。「埼玉風物詩」を通じて、宮澤の作品に親しんでいただくとともに、埼玉県の魅力に改めてふれていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたりまして、ご子息の宮澤鏡一様、宮澤新樹様をはじめ、ご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

さいたま市立大宮図書館

目次

開催にあたって……2
埼玉を歩いて来た……3
宮澤章二の「埼玉風物詩」……4
　ふるさとへの想い
　埼玉新聞　連載時代
　さいたまグラフ　連載時代
埼玉風物詩自筆原稿
「土―わが生誕の家はない―」……6
「歴史博物館にて・春―大宮公園・埼玉県立博物館―」……7
「歴史博物館にて・秋―大宮公園・埼玉県立博物館―」……7
「大宮駅生誕百年―大宮・国鉄大宮駅―」……8
「大榧幻想―与野の大カヤ・与野市―」……8
「利根導水路―利根大堰・行田市―」……9
「歳末魚歌―羽生・さいたま水族館―」……9
「森林にて―武蔵丘陵森林公園―」……10
「青春水路―戸田ボートコース―」……10
「通りゃんせ―川越・三芳野神社―」……11
「武甲の猿」……11
埼玉風物詩マップ……12
宮澤章二略年譜……14
出品目録……16



晩年、「埼玉風物詩」について語ったエッセイ

「埼玉を歩いて来た」宮澤章二

ことしは、新春から体調をくずした。そのため、最初〈埼玉新聞〉紙上に連載し、のち、発表の場が〈さいたまグラフ〉誌上に移って、以来、ずいぶん永く書きつづけている私の〈埼玉風物詩〉も、当分休むことにした。県内各地を自ら取材しなければ書けない詩なので、体の調子に自信が持てなくなると、肝心の作品が生まれようがない。

実際、月に一編なのだが、その一編を生むために、私は飽きることもなく、県内のあちらこちらを自分の足で歩いて来た。さまざまなことを、感じたり学んだりしながら歩くわけだが、その一つに、埼玉人間の伝統的な勤勉さがある。どんなに小さい田にも稲を植えつづけ、どんなに狭い畑にも野菜を育てつづけて、農民たちは、大地の恵みを頼りに生きて来たのだ。埼玉の平野・丘陵・山間地帯の到る所に、そういう埼玉人の、地味で実直な〈血〉の流れる響きが秘められており、私の心は、それを母の声のごとくに聞いた（後略）

出典「埼玉新聞」一九九五年四月十九日

写真「七四歳頃の宮澤章二」宮澤新樹氏提供

宮澤章二の「埼玉風物詩」

ふるさとへの想い

一九六一～一九六三

「埼玉風物詩」は、詩人・宮澤章二が埼玉県内の各地を訪れ、各地の歴史や風土を題材に書いた詩のシリーズです。制作のきっかけについて宮澤は後年、

「私は詩を書く仕事をしていますが、ある時期から、自分が生れ育ち、今もそこで暮している私の大好きな埼玉を、自分の足で歩いてみたい、自分の目ではっきり見たいという思いが非常に強くするようになりました。」

「埼玉・人とこころ」一九八六年九月号「埼玉風物詩を書きながら」より

と語っています。一九六一年、宮澤は吉見百穴を訪れ、「空室あり吉見百穴」と題した「埼玉風物詩」第一作品目を作ります。この作品は、宮澤の個人詩誌「礫」一九六三年四月号に掲載されました。

▲写真「41歳頃の宮澤章二」
宮澤新樹氏提供

埼玉新聞　連載時代

一九六三～一九七一

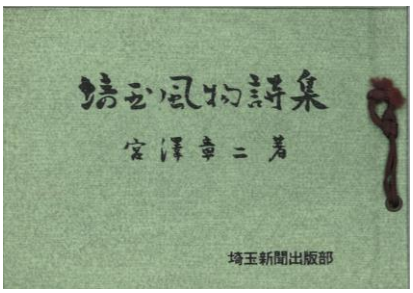
「礫」で掲載された「埼玉風物詩」ですが、「礫」は第二号をもって終刊となりました。

一九六三年「埼玉風物詩」は「埼玉新聞」にて掲載されることになります。一九六五年までの約二年間で、二五作品が発表され、その後連載は一旦終了しました。一九六六年、その二五作品を『埼玉風物詩集』として刊行しました。そのあとがきでは、連載再開にむけて次のような意欲を書いています。

「私の埼玉風物詩は、これをもって終るものではありません。地域的に見ても、埼玉には現在九十余の市町村があり、そのすべてとまではいかぬにせよ、とにかく、それに近い篇数の決定版を作るまで、私の肩の荷はおりないでしょう」

『埼玉風物詩集』あとがきより

その後、一九六九年から連載が再開され、一九七一年まで続きました。一九七三年以降は、「さいたまグラフ」へ発表の場を移すことになります。



▲『埼玉風物詩集』
株式会社埼玉新聞社提供

さいたまグラフ　連載時代
一九七三～一九九五

一九七三年、埼玉グラフ社から月刊誌「さいたまグラフ」が刊行され、第二号から宮澤の「埼玉風物詩」が掲載されることになります。「さいたまグラフ」での連載は二二年にもおよび、二六四作品が発表されました。

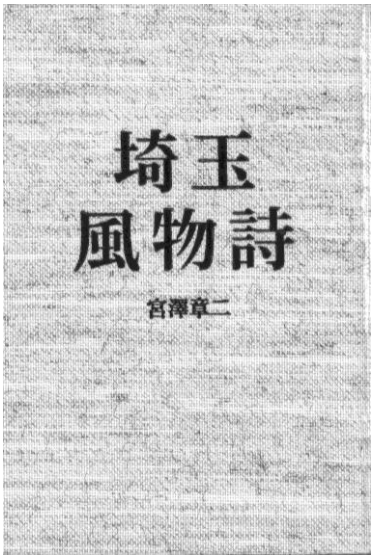
宮澤は「埼玉風物詩」執筆のため、自ら現地を取材して、そこで見たもの感じたことを作品にすることを大切にしていました。晩年も、取材と執筆を続けていた宮澤ですが、次第に体調の悪化が目立つようになり、「さいたまグラフ」一九九五年三月号に向けて書いた「悲恋浄土―墓二つ・大宮市旧指扇領―」をもって連載を休載します。その後同年七月号にて、宮澤への感謝の記事「埼玉に生きる　万人の心にしみる埼玉風物詩　宮澤章二詩の世界」が掲載され連載は終了しました。宮澤が七六歳のことでした。

▲『埼玉風物詩草稿ノート』(No.1)
宮澤が「埼玉風物詩」執筆のため、原稿の草稿をまとめたノート。調査のための新聞記事や、現地で撮影された写真なども保管されている。
さいたま文学館/所蔵

合計で二九七編書かれた「埼玉風物詩」のうち、旧大宮市を舞台にしたものが、十六編と最も多くなっています。これは、宮澤自身が大宮に住んでいたため取材がしやすかったことや、教育委員や市史編纂委員を務めた経験から地元の歴史にも詳しかったことが影響していると考えられます。

宮澤は、当初埼玉県にあるほぼすべての自治体を作品にしようという目標を掲げていましたが、惜しくも鳩ケ谷市・大滝村・川里村を残し連載は終了しました(合併後の市区町村はすべて網羅)。

題材としては、神社や寺などを扱ったものや、墓や塚や古墳などの歴史的な史跡を扱ったものが多いのが特徴ですが、埼玉の施設や公園なども題材にしています。



▲『埼玉風物詩』(私家版)
宮澤の没後に刊行。「さいたまグラフ」に掲載された「埼玉風物詩」から、58作品が掲載されている。

埼玉風物詩　二月号

土

―わが生誕の家はない―

宮澤章二

なんにもない　ふるさと
こころだけが匂っている　ふるさと

ここに　けやきの大木があったな
あれは　戦争の時に切られた
―もう　遠いことだな

ここに　きんもくせいの花が咲いたな
あの木は　どこかへ売られて行った
―おれが家を捨てたからな

仏たちよ　責めないでくれ
いや　いくら責められても仕方ないな
おれにはおれの道しかなかったから
その道を歩いただけのはなしだ

〈この手に得たものはなんであったか〉
おれにも急に白髪が増えたな

なんにもない　ふるさと
土になみだがしみてゆく　ふるさと

ITOYA NO. 31 20×20

No.2「土ーわが生誕の家はないー」　「さいたまグラフ」1977年2月号掲載

宮澤が生まれ育った羽生の生家について書いた詩。宮澤は、家業である米穀肥料商（べいこくひりょうしょう）を自分の代でたたんでおり、家を捨ててしまったのではないかという意識もあったようです。

▲写真「両親と写る、幼いころの宮澤章二」
宮澤新樹氏提供

▲写真「大正時代ごろの宮澤の生家」
宮澤新樹氏提供

歴史博物館にて・春 ―大宮公園・埼玉県立博物館―

宮澤 章二

あり余るほどの「物」を 花の大地に残し
人間はみな どこかへ消えてしまった
―悼む思いが 魂をひっそりと濡らす

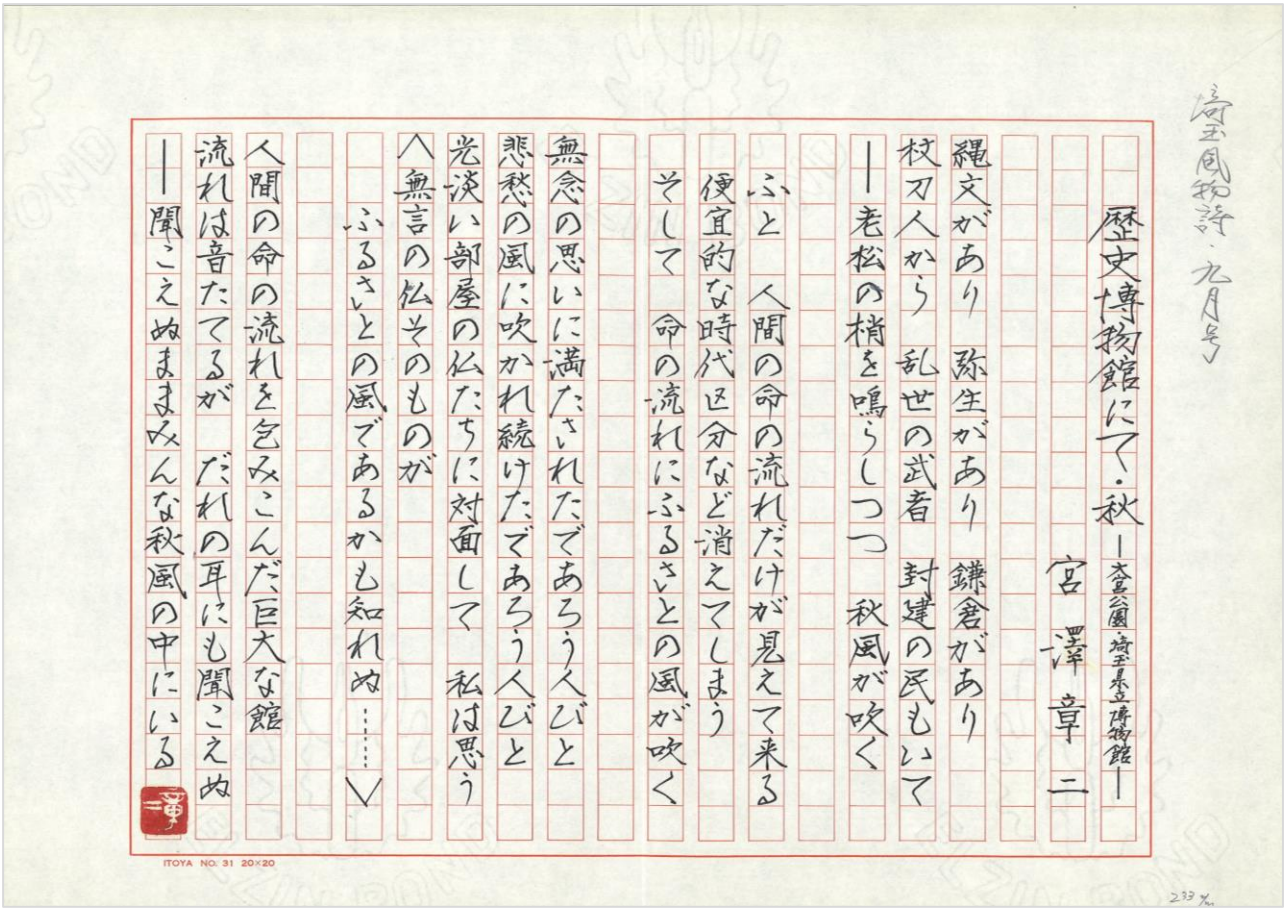
石器土器 寿能泥炭層遺跡出土の木製品
鉄剣も 仏像も 秩父緑泥片岩の板碑も
ひとの手がなければ 作られなかった
ひとの手がなければ 使われなかった

どれだけ多くの 喜怒哀楽の日常の手が
これら「物」たちの肌に触れたことだろう
重層する指紋 の奥に光る純粋な生の眼

日本列島の腹部・武蔵の 深い歴史空間に
おれの生涯も すっぽりと納まるのだな
祖先たちの心の形見 この「物」の美しさ
見つめるおれの魂に花の薫りがしみ入る

ITOYA NO. 31 20×20

No.3「歴史博物館にて・春ー大宮公園・埼玉県立博物館ー」　「さいたまグラフ」1984年4月号掲載



歴史博物館にて・秋 ―大宮公園・埼玉県立博物館―

宮澤 章二

縄文があり 弥生があり 鎌倉があり
校刀人から 乱世の武者 封建の民もいて
―老松の梢を鳴らしつつ 秋風が吹く

ふと 人間の命の流れだけが見えて来る
便宜的な時代区分など消えてしまう
そして 命の流れにふるさとの風が吹く

無念の思いに満たされたであろう人びと
悲愁の風に吹かれ続けたであろう人びと
光淡い部屋の仏たちに対面して 私は思う
人無言の仏そのものが
ふるさとの風であるかも知れぬ……

人間の命の流れを包みこんだ巨大な館
流れは音たてるが だれの耳にも聞こえぬ
―聞こえぬままみんな秋風の中にいる

ITOYA NO. 31 20×20

No.4「歴史博物館にて・秋ー大宮公園・埼玉県立博物館ー」　「さいたまグラフ」1984年9月号掲載

大宮公園内にあった、埼玉県立博物館（現・埼玉県立歴史と民俗の博物館）について書かれた詩です。春編と、秋編の二編が作成されています。展示を見た宮澤は、歴史の中で生きた様々な人々に思いを馳せ、博物館とは「人間の命の流れを包みこんだ巨大な館」だと感じています。

埼玉風物詩・三月号

大宮駅生誕百年 ―大宮・国鉄大宮駅―

宮澤章二

文明開化の波の突っ走る速度は早かった
明治十七年六月　高崎線・上野高崎間全通
明治十八年三月十六日　大宮駅誕生
この年七月　東北線・大宮宇都宮間開通

当時　陸蒸気が煙吐く　大宮駅の
埃っぽい駅前には家が二軒しかなかった
現在　生誕百年を迎えて混雑する駅前
なぜか　埃っぽさだけは同じようで……

高崎線と東北本線との　分岐点
それが　大宮駅の基本的な性格であった
人会うて　左右に分かれて　下り
分かれて　上って　また出会う〉
そんな情け持つ駅の素顔は　いまも変らぬ
―昭和五十七年六月　東北新幹線開業
―この年十一月　上越新幹線開業

ITOYA NO. 31 20×20

No.5「大宮駅生誕百年ー大宮・国鉄大宮駅ー」　「さいたまグラフ」1985年3月号掲載

大宮駅が開業100年を迎えた年に書かれた作品。鉄道の街・大宮のはじまりから新幹線開通まで、その歴史についてふれています。

埼玉風物詩　11月号

大榧幻想 ―与野の大カヤ・与野市―

宮澤章二

秋が来ると　榧の実は熟する
たとえ　千年生き続けた老樹であっても
いのちの実証を枝先につけること
―その約束を　まもろうとするのだ

いったい　だれとの約束であろうか
熟れた実の　ひと粒ひと粒は
流れるいのちに満たされて　光り
季節が遊ばせる赤とんぼの光と呼び合い

大地深く　太い根を張るのは
決して自ら揺るいではならぬ
その定めを　きっちりと生きる意志

巨木の沈黙は　天地の沈黙である
秋日　出たちが鳴き小鳥の声が響いても
千年の天景に　淫らな雑音はなかった

ITOYA NO. 31 20×20

No.6「大榧幻想ー与野の大カヤ・与野市ー」　「さいたまグラフ」1980年11月号掲載

妙行寺（中央区鈴谷）の国指定天然記念物「与野の大カヤ」が、千年にわたり根を張り実をつける姿に感銘を受け、巨木の息吹に耳を傾けています。

行田市（ぎょうだし）

埼玉風物詩　七月号

利根導水路 ―利根大堰・行田市―

宮澤章二

左岸　群馬県吾妻郡千代田村大字上中森
右岸　埼玉県行田市大字須加字船川
大利根の流れを　この地点で横断して
利根大堰　その長さ六九一・七米……

取り入れられた水は　三路に分れ
水田を潤す埼玉用水路　見沼代用水
荒川へ結ばれて飲用となる　武蔵水路

平野に描きだされた水の風景の壮大さ
利根大堰の泰然とかがやくあたり
川風大きく　まばゆい落日も大きく
その落日に向かって飛ぶ鳥の影も大きく

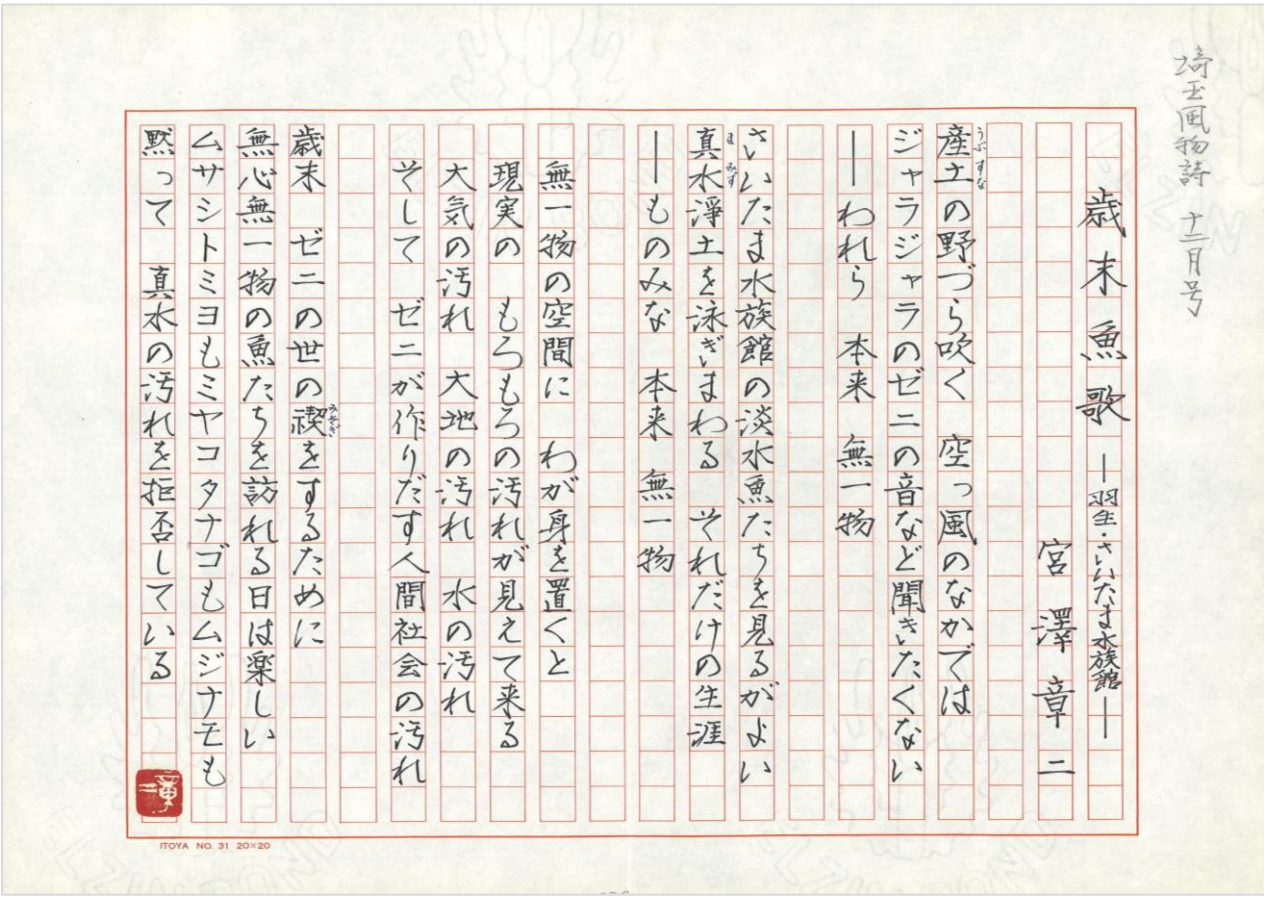
そして　ぼくらはいま　確実に知るのだ
流れ続けて尽きる日のない水の声が
ぼくらの体内をも鮮やかに貫くことを

ITOYA NO. 31 20×20

No.7「利根導水路ー利根大堰・行田市ー」　　「さいたまグラフ」1981年7月号掲載

利根導水路（利根大堰（とねおおぜき））は、川の流れを調節するための大掛かりな堰（せき）です。現地を訪れた宮澤は夕陽に輝く水路の壮大さと、力強いその流れに心惹かれます。

羽生市（はにゅうし）



埼玉風物詩　十二月号

歳末魚歌 ―羽生・さいたま水族館―

宮澤章二

産土（うぶすな）の野づら吹く　空っ風のなかでは
ジャラジャラのゼニの音など聞きたくない
―われら　本来　無一物

さいたま水族館の淡水魚たちを見るがよい
真水（まみず）澤土を泳ぎまわる　それだけの生涯
―ものみな　本来　無一物

無一物の空間に　わが身を置くと
現実の　もろもろの汚れが見えて来る
大気の汚れ　大地の汚れ　水の汚れ
そして　ゼニが作りだす人間社会の汚れ

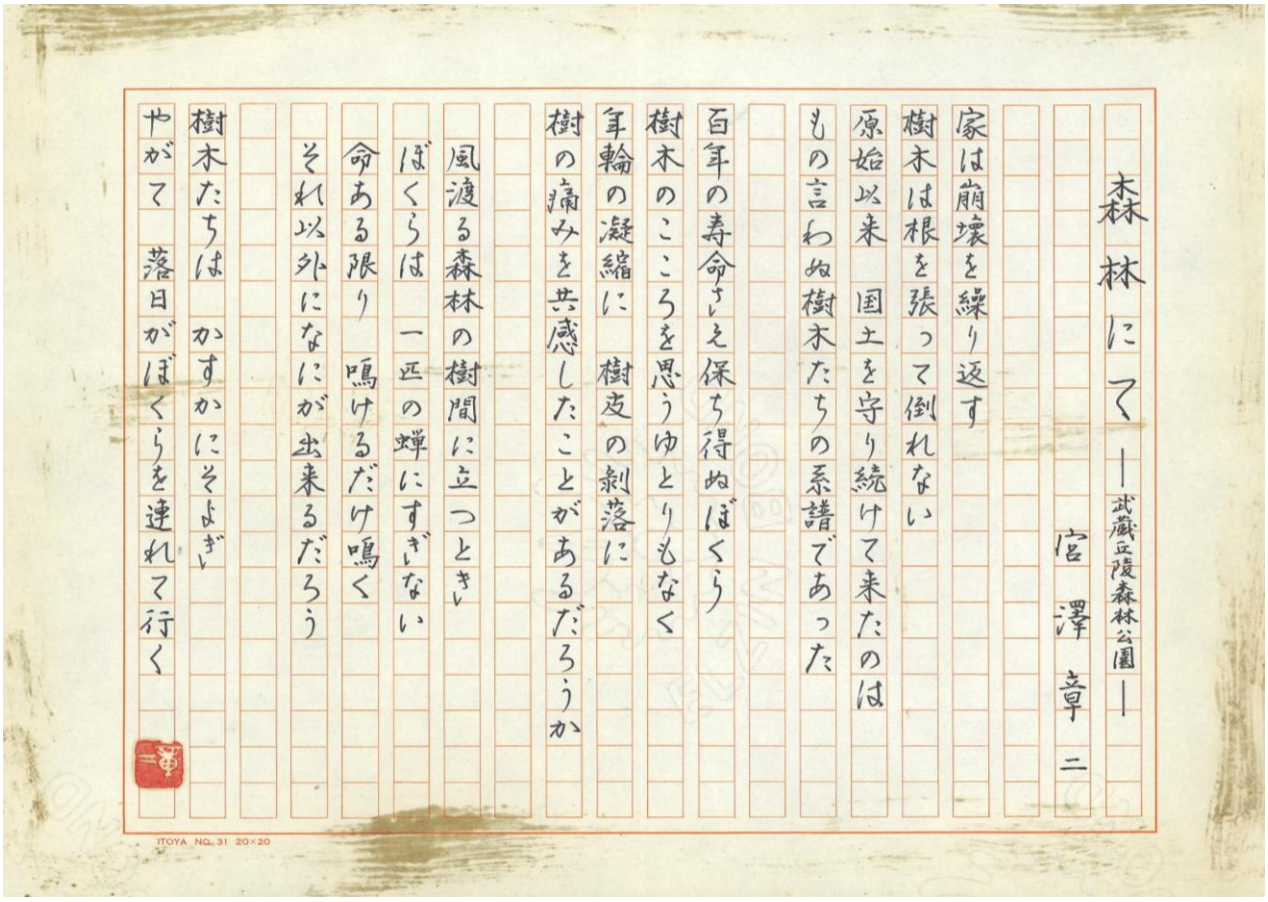
歳末　ゼニの世の禊（みそぎ）をするために
無心無一物の魚たちを訪れる日は楽しい
ムサシトミヨもミヤコタナゴもムジナモも
黙って　真水の汚れを拒否している

ITOYA NO. 31 20×20

No.8「歳末魚歌ー羽生・さいたま水族館ー」　　「さいたまグラフ」1983年12月号掲載

羽生水郷公園にあるさいたま水族館は、この詩が掲載された1983年に開館しました。清らかな魚たちを眺める宮澤は、みずからの禊（みそぎ）をも重ね合わせます。

滑川町（なめがわ）



森林にて
―武蔵丘陵森林公園―

宮澤 章二

家は崩壊を繰り返す
樹木は根を張って倒れない
原始以来　国土を守り続けて来たのは
もの言わぬ樹木たちの系譜であった

百年の寿命さえ保ち得ぬぼくら
樹木のこころを思うゆとりもなく
年輪の凝縮に　樹皮の剝落に
樹の痛みを共感したことがあるだろうか

風渡る森林の樹間に立つとき
ぼくらは　一匹の蝉にすぎない
命ある限り　鳴けるだけ鳴く
それ以外になにが出来るだろう

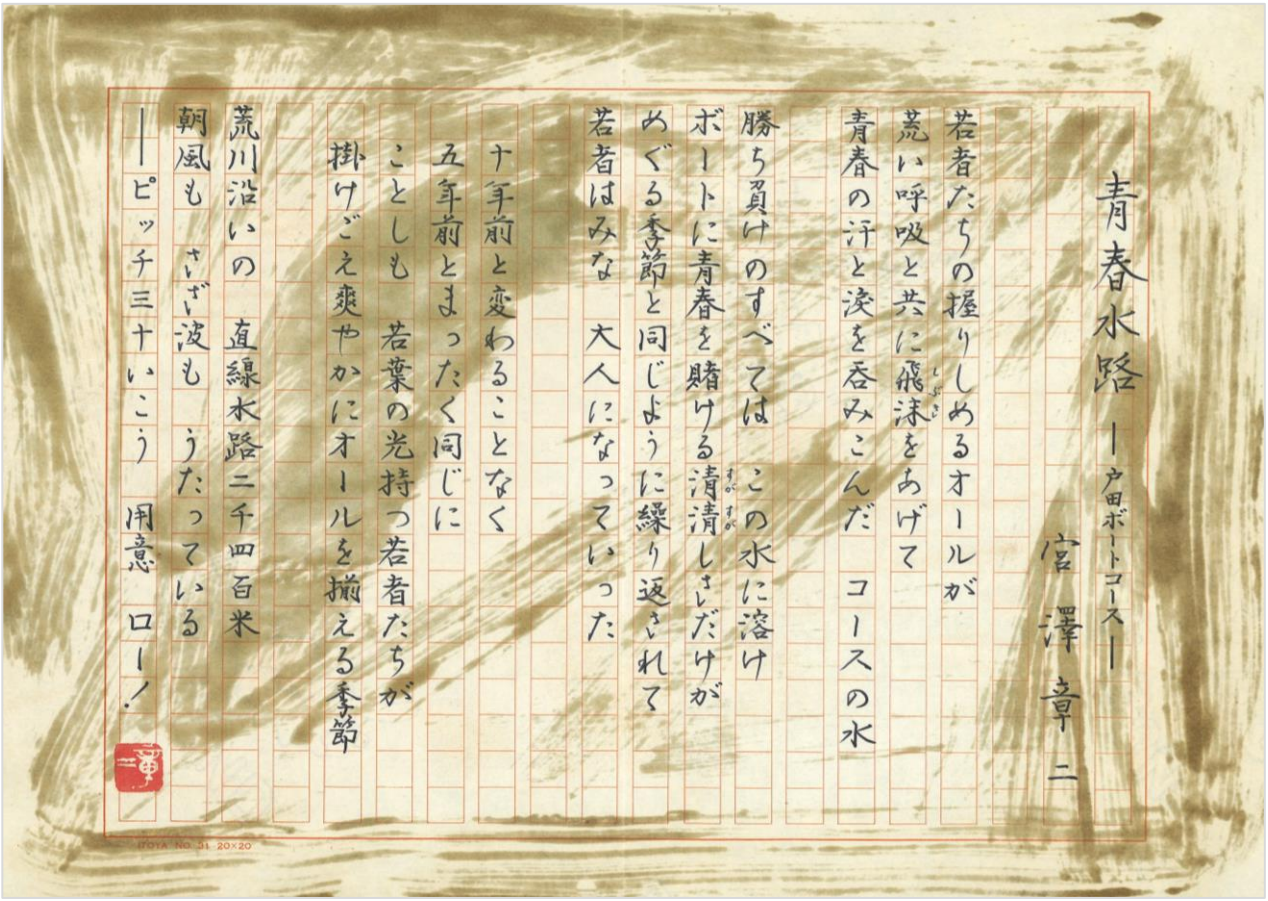
樹木たちは　かすかにそよぎ
やがて　落日がぼくらを連れて行く

ITOYA No. 31 20×20

No.9「森林にて―武蔵丘陵森林公園（むさしきゅうりょうしんりんこうえん）―」　「さいたまグラフ」1977年8月号掲載

公園を訪れた宮澤は、悠久の年月を生き続ける木々に想いを馳せます。そして、自分たち人間にできるのは、蝉のように命ある限り鳴くことだと言います。

戸田市（とだし）



青春水路
―戸田ボートコース―

宮澤 章二

若者たちの握りしめるオールが
荒い呼吸と共に飛沫（しぶき）をあげて
青春の汗と涙を呑みこんだ　コースの水

勝ち負けのすべてはこの水に溶け
ボートに青春を賭ける清清（すがすが）しさだけが
めぐる季節と同じように繰り返されて
若者はみな　大人になっていった

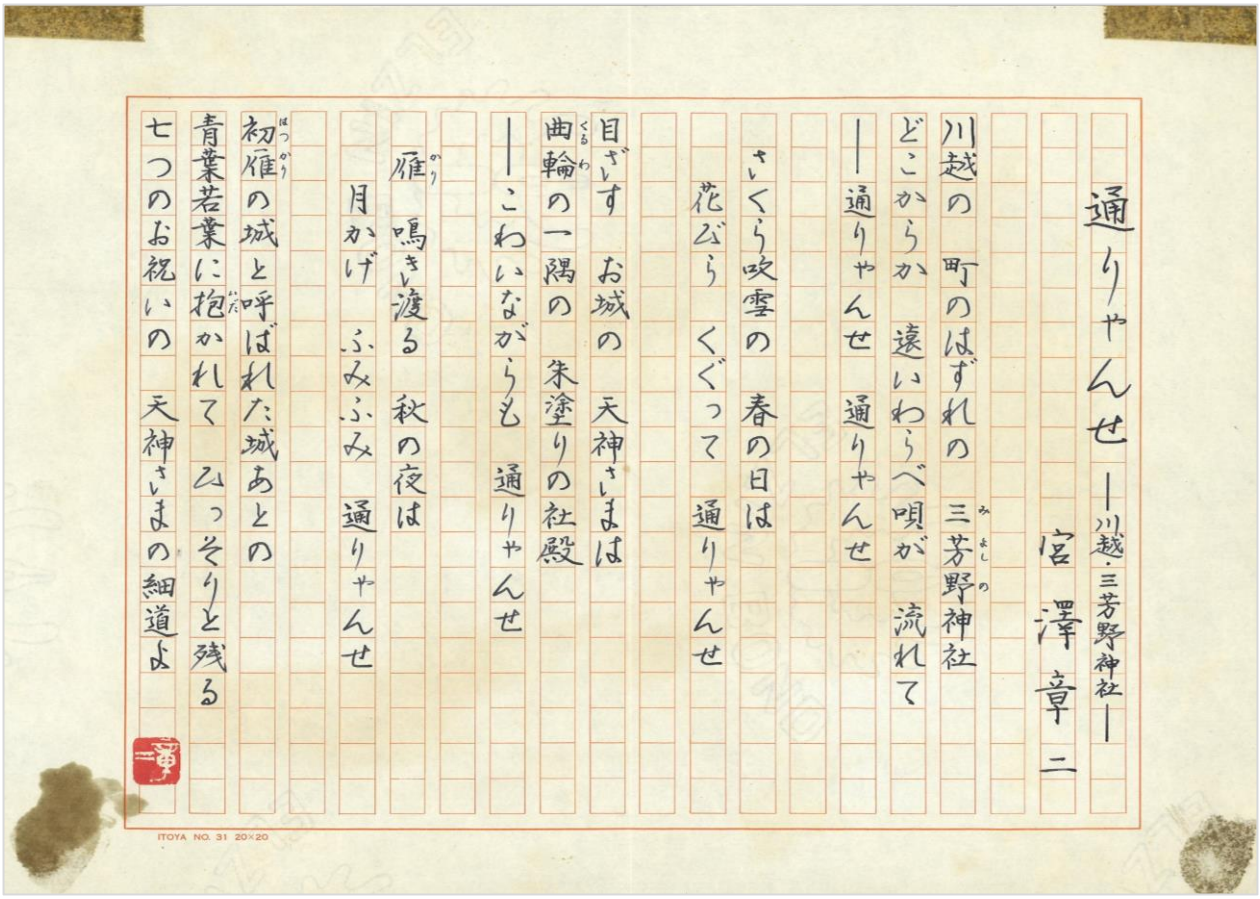
十年前と変わることなく
五年前とまったく同じに
ことしも　若葉の光持つ若者たちが
掛けごえ爽やかにオールを揃える季節

荒川沿いの　直線水路二千四百米
朝風も　さざ波も　うたっている
―ピッチ三十いこう　用意　ロー！

ITOYA No. 31 20×20

No.10「青春水路―戸田ボートコース―」　「さいたまグラフ」1978年5月号掲載

漕艇場（そうていじょう）では、今日も若者たちがオールを手にレースに打ち込んでいます。宮澤は、5年前とも10年前とも変わらぬその勇姿を見つめていました。



通りゃんせ ―川越・三芳野神社―

宮澤章二

川越の　町のはずれの　三芳野神社
どこからか　遠いわらべ唄が　流れて
―通りゃんせ　通りゃんせ

さいくら吹雪の　春の日は
花びら　くぐって　通りゃんせ

目ざす　お城の　天神さまは
曲輪の一隅の　朱塗りの社殿
―こわいながらも　通りゃんせ

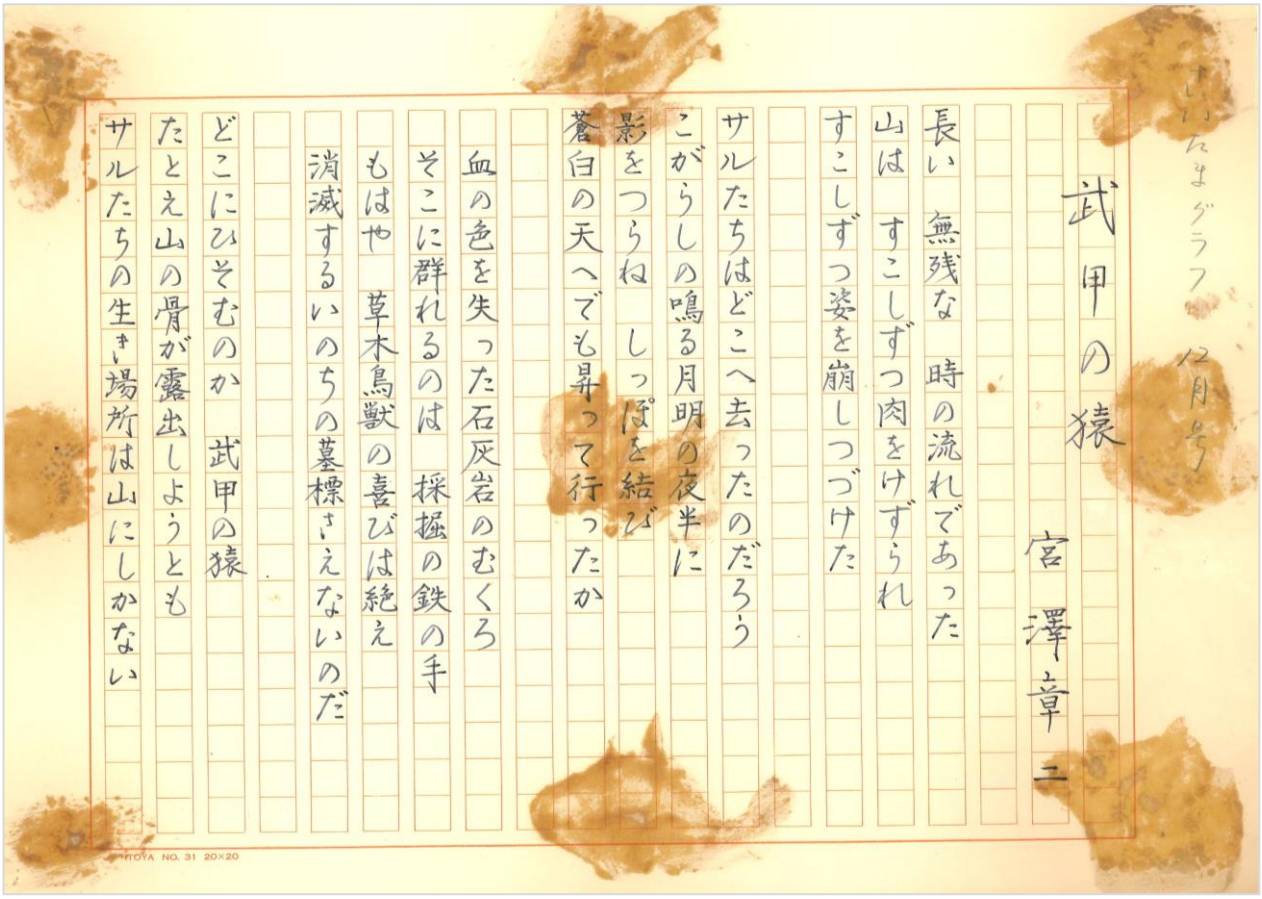
雁　鳴き渡る　秋の夜は
月かげ　ふみふみ　通りゃんせ

初雁の城と呼ばれた城あとの
青葉若葉に抱かれて　ひっそりと残る
七つのお祝いの　天神さまの細道よ

ITOYA NO. 31 20×20

No.11「通りゃんせ―川越・三芳野神社―」　　「さいたまグラフ」1979年5月号掲載

川越にある三芳野神社は、わらべ歌「通りゃんせ」発祥の地と言われています。自らの想いを歌詞に載せ、城跡での感慨に浸っています。



さいたまグラフ 12月号

武甲の猿

宮澤章二

長い　無残な　時の流れであった
山は　すこしずつ肉をけずられ
すこしずつ姿を崩しつづけた

サルたちはどこへ去ったのだろう
こがらしの鳴る月明の夜半に
影をつらね　しっぽを結び
蒼白の天へでも昇って行ったか

血の色を失った石灰岩のむくろ
そこに群れるのは　採掘の鉄の手
もはや　草木鳥獣の喜びは絶え
消滅するいのちの墓標さえないのだ

どこにひそむのか　武甲の猿
たとえ山の骨が露出しようとも
サルたちの生き場所は山にしかない

ITOYA NO. 31 20×20

No.12「武甲の猿」　　「さいたまグラフ」1974年12月号掲載

武甲山は、石灰岩の採掘により、無残な山肌を見せています。ここに住んでいた猿たちは、どこへ追いやられたのでしょう。猿たちの無事な行く末を願っています。

No.5 大宮駅東口と西口（さいたま市大宮区）

No.6 妙行寺の大カヤ（さいたま市中央区）

写真撮影：宮澤新樹氏
撮影日：2024年冬～2025年春

No.10 戸田ボートコース（戸田市）

No.11 三芳野神社（川越市）

No.12 武甲山（秩父市・横瀬町）

No.2 宮澤家の生家（羽生市）

※現在はありません

No.3 ・ No.4 大宮公園と埼玉県立歴史と民俗の博物館（さいたま市大宮区）

埼玉風物詩マップ

本目録の自筆原稿ページのNo.でご紹介します。

No.7 利根大堰（行田市）

No.8 さいたま水族館（羽生市）

No.9 国営武蔵丘陵森林公園（滑川町）

宮澤章二略年譜

あゆみ

西暦	年齢	
一九一九	〇	六月十一日、埼玉県北埼玉郡三田ヶ谷村弥勒(現・埼玉県羽生市)にて、父・友二と母・きみの長男として生まれる。
一九二六	七	東京市日本橋区(現・東京都中央区)の箱崎尋常小学校に入学する。
一九二七	八	三田ヶ谷尋常高等小学校に転校。
		翌年、二年生を終えると再び箱崎尋常小学校に戻る。
一九三二	十三	箱崎尋常小学校を卒業する。府立高等学校(現・東京都立大学の前身)の尋常科に入学する。府立高校在学中から、俳句や小説の投稿をはじめる。
一九三四	十五	母が亡くなる。この年から翌年にかけて祖父や兄弟が相次いで亡くなる。
一九三九	二〇	府立高等学校を卒業。東京帝国大学(現・東京大学)経済学部商業学科に入学する。
一九四〇	二一	父が亡くなる。大学を退学して、羽生尋常高等小学校(現・羽生市立羽生北小学校)の代用教員になる。
一九四一	二二	代用教員を退職する。東京帝国大学文学部美学科に再入学する。
一九四二	二三	自身が作詞した「花かをる」を応募、翌年卒業式の歌として採用される(作曲・下總皖一)
一九四三	二四	東京帝国大学を半年間早く繰り上げ卒業する。
一九四四	二五	中島飛行機に入社する。群馬や福島の工場で勤務する。
一九四五	二六	終戦により、中島飛行機が解散。九月に三田ヶ谷村に戻り、不動岡町(現・加須市)に住んでいた岡安迷子のもとで、一九四七年まで俳句雑誌の編集に携わる。
一九四七	二八	現在の埼玉県立不動岡高等学校の教員になり、国語を教える。原道村(現・加須市)出身の作曲家・下總皖一に手子林小学校校歌の作曲を依頼したことが縁で、校歌などの作詞の仕事をはじめる。
一九五一	三二	不動岡高等学校を退職する。東京都荒川区に転居する。NHKなど放送局のラジオ歌謡の作詞、放送台本の執筆などに携わる。
一九五六	三七	第一詩集『あんぶくの臍』を刊行する。
一九五七	三八	大宮市吉野町(現・さいたま市北区吉野町)に転居する。
一九六一	四二	大宮市史編纂委員を委嘱される。大宮市の教育委員会教育委員となる(一九六九年まで、任期最後の二年間は教育委員長)。
一九六三	四四	童謡詩『むぎばたけ』を創刊する。
		埼玉新聞にて「埼玉風物詩」の連載をはじめる。
一九六五	四六	詩集『蓮華』を刊行する。
一九六六	四七	詩集『旅路』を刊行する。
		詩集『埼玉風物詩集』を刊行する。
一九六九	五〇	詩集『空存』を刊行する。
一九七〇	五一	教育文化功労者表彰(埼玉県教育委員会表彰)を受ける。
一九七一	五二	詩集『枯野抄』を刊行する。
		この年で、「埼玉新聞」での「埼玉風物詩」の連載が終了する。
		この年以降、童謡「ジングルベル」の歌詞が宮澤章二訳に統一される。
一九七二	五三	日本童謡賞を受賞する。
一九七三	五四	「詩の研究会」が発足、講師として約三〇年指導する。
		「さいたまグラフ」にて「埼玉風物詩」の連載を始める。

一九七五	五六	童謡詩集『知らない子』を刊行する。
一九七六	五七	「ホームスタディほくしん」で中学生向けの詩の連載をはじめる。 埼玉文化賞（芸術部門）、赤い鳥文学賞特別賞を受賞する。 詩集『宮澤章二詩集（昭和詩体系）』を刊行する。
一九七七	五八	埼玉文化功労者表彰（埼玉県知事表彰）を受ける。 大宮詩人会が発足、初代会長に就任する。
一九八〇	六一	詩集『出発の季節』を刊行する。
一九八一	六二	浦和駅西口に、宮澤の詩「さいたまの譜」の碑が建立される。
一九八五	六六	地域文化功労者表彰（文部大臣表彰）を受ける。 詩集『まご抄』を刊行する。
一九八六	六七	詩集『拾遺抄』を刊行する。 詩集『前進の季節』を刊行する。
一九八九	七〇	詩集『風鈴抄』を刊行する。
一九九〇	七一	大宮市文化賞、下總皖一音楽賞特別賞を受賞する。
一九九一	七二	詩集『風魂歌』を刊行する。
一九九四	七五	羽生市民栄誉賞を受賞する。
一九九五	七六	体調不良により、『さいたま風物詩』の連載を休載する。
二〇〇〇	八一	詩集『晩年抄』を刊行する。
二〇〇二	八三	詩集『結実の季節』を刊行する。
二〇〇五	八五	三月一一日永眠。
二〇〇六		詩集『青春前期のきみたちに　詩人宮澤章二の七七のメッセージ』が刊行される。
二〇〇七		詩集『埼玉風物詩』（私家版）が刊行される。
二〇一〇		詩集『行為の意味　青春前期のきみたちに』が刊行される。
二〇一一		東日本大震災発生後に放送されたコマーシャル「見える気持ちに」がきっかけで、宮澤章二の詩に注目が集まる。
二〇一三		羽生市立三田ヶ谷小学校内に宮澤章二記念館が開設される（廃校にともない、現在は羽生市立郷土資料館で資料を展示）
二〇一八		詩集『行為の意味　青春前期の君たちへ送る心の詩』の新装版が刊行される。
二〇二〇		大宮図書館にて、企画展「詩人・宮澤章二と大宮」と、関連講演会が開催される。
二〇二二		大宮図書館にて、新春特別展示「宮澤章二の年賀状ー寅ー」が開催される。
二〇二三		大宮図書館にて、新春特別展示「宮澤章二の年賀状ー卯ー」が開催される。
二〇二四		大宮図書館にて、新春特別展示「宮澤章二の年賀状ー辰ー」が開催される。
二〇二五		大宮図書館にて、新春特別展示「宮澤章二の年賀状ー巳ー」が開催される。 大宮図書館にて、「詩人・宮澤章二からのエール～自分の一歩を～」、「宮澤章二の埼玉風物詩～さいたまを歩く、さいたまを巡る～」が開催される。 詩集『新版　行為の意味　青春前期の君たちへ送る心の詩』が刊行される。

企画展「宮澤章二の埼玉風物詩　さいたまを歩く・さいたまを巡る」出品目録

No.	種別	資料
1	ノート	「埼玉風物詩草稿ノート」
2	原稿	「土ーわが生誕の家はないー」（羽生市）
3	原稿	「歴史博物館にて・春ー大宮公園・埼玉県立博物館ー」（さいたま市）
4	原稿	「歴史博物館にて・秋ー大宮公園・埼玉県立博物館ー」（さいたま市）
5	原稿	「大宮駅生誕百年ー大宮・国鉄大宮駅ー」（さいたま市）
6	原稿	「大榧幻想ー与野の大カヤ・与野市」（さいたま市）
7	原稿	「利根導水路ー利根大堰・行田市ー」（行田市）
8	原稿	「歳末魚歌ー羽生・さいたま水族館ー」（羽生市）
9	原稿	「森林にてー武蔵丘陵森林公園ー」（滑川町）
10	原稿	「青春水路ー戸田ボートコースー」（戸田市）
11	原稿	「通りゃんせー川越・三芳野神社ー」（川越市）
12	原稿	「武甲の猿」（秩父市・横瀬町）

No.1　さいたま文学館蔵

右記以外の資料はさいたま市立大宮図書館所蔵です

会場内展示パネル	初出掲載資料
『埼玉風物詩集』あとがき	『埼玉風物詩集』一九六六年
エッセイ「埼玉風物詩を書きながら」	「さいたま人とこころ」一九八六年九月号
エッセイ「埼玉を歩いて来た」	「埼玉新聞」一九九五年四月十九日

主な参考文献

『埼玉風物詩集』宮澤章二／著　埼玉新聞社出版部　一九六六年
『宮澤章二ー風と光の詩人企画展ー』さいたま文学館／編　さいたま文学館　二〇一五年
「さいたま人とこころ」一九八六年九月号　埼玉文化懇話会
「アコレおおみや」二〇一〇年九・十月号　アコレおおみや編集部
「紀要」第十号　埼玉県立歴史と民俗の博物館／編　埼玉県立歴史と民俗の博物館　二〇一六年
「アコレおおみや」二〇一九年四・五月号　アコレおおみや編集部
「埼玉新聞」一九九五年四月一九日
「埼玉県立歴史と民俗の博物館ホームページ」https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/
「（独）水資源機構 利根導水総合管理所ホームページ」https://www.water.go.jp/kanto/tone/index.html
「川越市ホームページ」https://www.city.kawagoe.saitama.jp/kanko/k-spots/1011572/1011580.html
「武甲山資料館ホームページ」https://www.bukohzan.jp/

＊著作権には十分配慮していますが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

宮澤章二没後二〇年展示

「宮澤章二の埼玉風物詩　さいたまを歩く、さいたまを巡る」

発行日　二〇二五年七月三日
編集・発行　さいたま市立大宮図書館
埼玉県さいたま市
大宮区吉敷町一ー一二四ー一
TEL〇四八ー六四三ー三七〇一